

23. 99m Tc-colloid により腎イメージの得られたうつ血性心不全の2症例

真下 正美 藤岡むつみ
 平岡 久樹 宮前 達也
 (埼玉医大・放)
 土肥 豊
 (同・2内)

最近, Coleman や Higgins らにより, うつ血性心不全患者において, 腎への高摂取像を認めた報告がなされた。われわれも2例のうつ血性心不全患者の肝シンチグラフィーにおいて, 偶然にも同様の経験を得たのでここに報告する。

症例1. 8年前から, うつ血性心不全をくり返している47歳男性で, 99m Tc-phytate と 99m Tc-Sn-colloid の, 両側腎高摂取像を認めた。

症例2. 5年前から僧帽弁閉塞不全により, うつ血性心不全をくり返している33歳男性で, 99m Tc-phytate の両側腎高摂取像を認めた。

99m Tc-colloid 腎摂取のメカニズムに関する Mikhael & Evens の動物実験報告によれば, 近位尿細管細胞に潜在的貪飢能があり, この細胞と接触する colloid (3~100 m μ) の量が増加し, さらに接触時間が延長したとき摂取も増加するとしている。そしてこのような病態生理状態は血液循環時間が延長し肝における colloid 貪飢能の低下をまねくうつ血性心不全時に相当するという。

われわれの経験した2例は循環時間の延長という点では一致していたが, 肝 colloid 貪飢能, colloid size の2点で実験結果とは一致しなかった。

この他のメカニズムとして Klingensmith らの腎毛細管 fibrin 沈着説があるが, これのみですべてを説明することはできない。

今後, われわれも臨床例を増して共通する病態生理を追求する予定である。

24. 腎シンチフォトと超音波断層法の比較検討

藤野 淡人 池田 滋
 石橋 晃
 (北里大・泌)
 小林 剛 石井 勝己
 (同・放)

超音波断層法の腎尿路系疾患における有用性は広く認められており, また検査法としての侵襲性, 簡便性, 経済性などの点からも優れた検査法と考えられる。特に腎腫瘍性病変におけるその診断精度は高く, 同じく非侵襲性である腎シンチフォトによる機能あるいは動態観察を併わせることにより, さらに高い診断精度がのぞまる。今回, 著者らは, 総合イメージ診断のうちでも侵襲性の少ないこれら二つの検査法を併せて行うことにより, 有効であった症例を経験したので, 報告すると併に, 併用診断法について若干の考察を加えた。腎腫瘍性病変の診断, 特に実質性腫瘍と囊胞との鑑別がしばしば問題となり, 特に hypovascular あるいは avascular を呈する腎腫瘍の場合は, 腎シンチフォトによる False Negative の頻度が増し, この点を補う意味で, 超音波断層法の形態診断における有用性が強く示唆された。その他, 水腎症, 腎孟腫瘍, 囊胞腎等の診断, あるいは, 種々の理由による IVP 不能例においても, 腎シンチフォトと超音波断層法の併用は腎尿路系疾患の診断上, 有用性が認められた。